



夢想する人アガメムナン

著者	プリンス・ルードヴィッヒ・オブ・ヘセツ, 谷口 敏郎, プリンス・ルードヴィッヒ・ヘセツ
雑誌名	同志社文學
号	10
ページ	67-78
発行年	1931-02-25
権利	同志社大學英文學科文學會
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000016762

夢想する人アガムナン

プリンス・ルードキツヒ・オブ・ヘッツ

谷 口 敏 郎 譯

嘗てアガムナン・ワースルフイングと云ふ少年が居た。"斯慶畏ろしい名なんて、何んと不憫な"と諸君は思ふだろう……然し彼はそうは思はなかつた。夕方なんかには窓口に立つて、彼のおとなし氣なちよつぱりとび出た限で向ひ側の家の壁を眺めて居る時、大理石の標札なら此の窓の下では向ふからどんなに立派に見える事だろう事などと想像するのが好きだつた。想像の黒びかりの大理石の上には輝く金びかの文字で"此處には嘗てアガムナン・ワースルフイングが住めり"と書かれてあつた。……その外は何も書かれてないが。彼が此慶事を考へて居ると、自分のむさくらしい部屋を忘れ、自分が最も貧しい人々の一人である事や、地上に於ける最も曖昧な人間の一人である事なんか全く忘れて了ふのだつた。彼は自身が突然變じて動いて居るのを感じた。彼の肉體は窓口の所に立つた儘だつたけれど、"彼"と云ふものが突然去つて了つたのだつた、彼は一秒間鏡に寫つた様な自分自身を見た。次に"彼"は街路に立つて居た。その家は、どう云ふものか古びて崩れて居る様に見えた。

自分の名を書いた標札だけが、時と云ふものに依つてそうは虐たげられて居なかつた。彼は立つて待つて居た。と云ふのは通る人々がそれについて何んと云ふだろうかと云ふ事を知り度かつたからだ。多くの人が彼を通り過ぎて行つたけれど誰一人として注意しなかつた。たゞ一寸知り度い爲にアガムナンは一人の通行人に云つた"ネー君 (お氣の毒だが彼はそう云つた)——此の標札は何の爲に其處に掲げられてるんですか。"答へはこうだつた。"何の考へも

なしに。"それで仕舞だ。——窓の下の御路を足音が急いで居るだけだつた。——アガムナンは考へた"標札なんか大した事になりやしない。人間は何か他の方法で名聲を得なけりやならない"と。けれどどんな方法で?、"私が自分の名が有名になり度いつて思ふつて?。"と幾人の人が云つた事か。後になると彼等の名は小ぢんまりと彼等の墓石に書かれるんだ。けれど唯だ通りすがりの人々に名を知らすだけだ、光榮の爲ぢやない。

哀れなアガムナン、彼はどうして自分の名を有名にすべきか。その時突然斯麼考へが彼に浮んだ。"己は本を書いてやろう。"——一體幾人の人間が既に此の事を考へた事か、そして實際そうした事だろう。——あゝ——。そして今度アガムナンだ。誰もそれが出来ない事だと想像したろう。然しそれは仕上つた。アガムナンは"名聲への道"に就いて書いた。實際に戦慄すべき犯罪が名聲の爲にいくら行はれた事か、然し又如何に多くの善い事がその動機に歸せられ得る事か。そして彼は全て此の事を立派な美しい實例で指示した。又彼は立派な美しい文章を用ひた。此等の文章の多くは全く難解だつた、それで結局人は此の本が非常に立派なんだと考へた。ある人にとつてそれは一種の"默示"だつた。多くの人は、錯雜な幽玄な文章で彼が云はんとした事を理解してくれて居た。全て此の事がアガムナンを大へん敬慢にした、と云ふ譯は、彼は自分でも自分の文章が理解出来なかつたからだ。けれど彼は又溫和な少さい微笑を自分のものにして居た、そして此の微笑はその本全體よりも價値あるものであつた。此麼利巧な難解な事柄を書いて得た自分の名聲が何で出来て居るかを彼は悟つて居た。

扱て、彼が暗闇の中でベットに横になつた時、彼は最早、自分の名が金ピカのラテン文字で書かれた大理石の標札の事や、本の事を夢見なかつたが、づつと遠い森の事や、秋の枯葉の囁く葉摺れの事を夢見た。高い、いつまでも青々した遠い山山の事や、水面を美しい黒い白鳥が滑つて行く銀色の湖水の事なんかの夢を見た。そして目醒めた時彼は夢見た事の一部始終を書き下ろした、それは畏ろしい謔言だつた!。此は少くとも批評家や彼の幻想を讀んだ人々が云つた事だつた。けれど彼にしては悲しかつた。それでもつと餘計に微笑しなければならなかつた。何故なら、"彼が悲しい時に誰が笑はないであろうか、"からだ。彼は又何かをすでに學び知つて居た。自分の心を世界に對して咎められる事

なしに披歴し得るほんとに偉い人々が極く僅かしかない事も分つて居た。若し身分の低い單純な人間がそうすれば、結果はいつも「謔言」なんだ。然しそうは云ふものゝ、間もなくアガメムナンはもう一寸も悲しくはなかつた、と云ふのは彼が夢に住み且、世間が彼を忘れて了つたからだ。

彼は全く獨りぼつちで或る農夫の家に起居して居た。毎朝花に灌水してやつて、それから彼の小さな温和な微笑をうかべて夢想した。彼は大へん老いた。或る日彼は疲れて、弱つて、明日になれば自分も死ななけりやならぬと感じた。そしてアガメムナンは微笑を浮かべて、眼を閉ぢた。そして靜かに待つて居た。それからもう一度眼を開いた、そして全くそつと云つて見た、"己の名は？。己の名は何だつけなあ。己は自分の死をつげねばならないのだ！。どうして。——何を、名前だけ？。……フン、そうだ——"。彼は微笑した。"謔言だつて！、それで充分だ！。——何故なら……あの世で。"それから彼は死んで了つた。諸君は、哀れなアガメムナンが死ぬ時にちよつぱり迷つた事がお分りでせう。……けれど"彼"が死んだ時、小年のアガメムナンは窓口の所で目が醒めた、そこで彼は五分間以上も立ちつくして居たんだ。

彼はあたりを見廻したそして、素速く家を出て、自分の靈間學校に出掛て行つた。アガメムナンが作文を出す時、懶巧で、えらい教育を受けた、多くの本を"理解し"又その"精神を感じて"居る先生は斯う云つた。"お前さん、君の作文は全く夢見たいな謔言だね"と。けれどアガメムナンは自分で考へた。"謔言だつて！ フン、それや己の名だ、それはあの世では充分だつたんだ。それなのに何故此の世ぢやいけないか。必ずしも金ビカラテン文字で大玉石の上を書かれないでもない。"哀れなアガメムナンが少し迷つた事がお分りでせう。けれど誰に分るものか！。"謔言"はワースルフリングよりほんとにもつと立派な名だ、そうはお思ひにならない？。

嘗て少年アガメムナンは一匹の"ダツケル"を持つて居た。此の"ダツケル"は事實ほんとのダツクスハウンドぢやなかつた——ほんとだ。彼は大きすぎて、眞直な脚を持つて居た。ほんととのダツケルは眞直な脚を持つて居ない。アガメムナンの犬は又系圖を持つて居なかつた。若し誰かが彼の祖先を尋ねたらその人は吃驚した事だろう。若し誰かど彼

の糸圖を立てねばならなかつたのなら、その人は臆を消した事だろう。最もや、や、こい、いのであつた。……アガメムナンの犬はアダルバートと云ふのだつた。何故彼がそう呼ばれたかをアガメムナンは洩さなかつた。誰も彼に興味も持たなかつた。アダルバートは彼の眞直な脚以外に大きい特徴を持つて居た。彼は魂を持ちアガメムナン小年を愛して居たけれども時々、それもほんの時々だが彼は家に居なかつた。そして時々むつとしてアガメムナン小年を傷つけた。此はアガメムナンも魂を持つて居た爲に彼の心を傷つけた。犬は主人が自分同様に犬の魂を持つて居らない事を不憫だと思つた。此の種の事はもつと立派に調子を合はされた。小年アガメムナンは犬を不憫がつた、と云ふのは犬が人間の魂を持つて居なかつたからだ、犬自身は必ずしも幸福ぢやなかつたが。而り斯くの如くして人は自分同様のものを持つて居ない者を不憫がるものだ。大いに自己否定して誰か他の者同様にならうと人がすると、その人はきつと踏み躪られて、弱者と云はれるのだ。彼が全く他人に無關心になると、誰が彼を最早哀れんだり羨んだりする事が出来ないうらうか、而り兩方乍らの感情は大へん美しいんだ。殊に「魂ある」人間にとつては——よく記憶しなさい——個性を失ふ事を用心なさいつて云ふ言葉は祝福なんですよ。若し人間が悪くならないなら、彼等は皆嗟言云ひになるのだ。人が悪うなれば他人に何か云へるのだ。

けれどアガメムナンとアダルバートに戻る。

或る日犬君アダルバートは迷つた。魅力のある顔立ちと惚々する目差をもつた體カクダの小さい婦人の犬が居た。アダルバートは彼女の顔立ちと眼に參つて了つた。事實はこうだ。彼は公園で迷つて了つた。アガメムナンは彼を探す事を夢見なかつた、彼はアダルバートをよく知り、又惚々する目差に對して彼が弱い事も知つて居た。小年アガメムナンも又づつと町から遠くに散歩に出掛た。彼は町の近傍の岡の上の花咲き亂れた園に來着いた。堀越しにライラックが花もたわゝにその憧れる様な腕を差し延べて居た。けれど彼にはとどかなかつた。

堀が高すぎたからだ。彼はライラックの繁みの前に立つて尋ねた「小さいライラックの花よ、あなた達はほんとうに

園を離れ度く思ふかね、私はあなたの方の様に何年も何年も立ち續け度いよ。そして自分の葉に夢見る風が聴き度いよ、夜な夜なに月に向つて小歌を歌ふ夜鶯の世話がし度いよ、小さいライラツクの花よ、私と代り度くはないかね」と。ライラツクの繁みは答へなかつた。小年アガムナンはそれが答へられない事を知つて居た。彼は學校で習つた事がある。植物は感情なく、己れの意志に従ひて動き得ざるものなり。而り勿論の事音を發する能はざるものなり」と云ふ事を。若し彼が此れだけを知らなかつたら、おそらくもつと餘念なく聽耳立て、ライラツクの繁みのさらさら云ふ答を聞いた事だらう。「哀れなアガムナンよ、あなたは私達を美しいと思ふ許つかりに私達の様な花になり度いと思ふのですよ。あなたは此處から去り度いと思ふでしょう。けれど私達は通りすがりの人々の眼を見入る事が出来る様、舞臺に花咲く腕を差し延べて居るんですよ。そうですよ眼には多くの事が分りますもの……若しあなたがそれをおしになれば、アガムナン、あなたもそうは淋しいでせう。アガムナン、アガムナン、アガムナン……」と園は葉摺れ合つた。

彼は歩み續けた。そして高い門の所に來た。

門の後に小女が立つて彼を見て居た。顔に雀斑があつて、蒼白めた麻色の髪をして居た。

アガムナンは此れや面白いと思つて笑つた。けれどほんとは彼は面はゆいたために笑つたのだつた、と云ふのは彼女が、自分がライラツクの繁みに饒舌つて居るのを聞いたに違ひないからだ。

小女はけれど笑はずに彼を眞面目に眺めた。

アガムナンは考へた。「彼女は空の様な碧眼をして居る、怒つても彼女は天の様にいいな。」と。アガムナン少年が極く僅かの人々しか知らなかつた事を御存じでせう。すると少女は口を開いて、ゆつくり注意深く云つた。「あなたは美しくはありませんよ、ね」と。けれどアガムナンは彼女の眼を見た許りだつた。——今は彼女は眼をそらせて了つた。

彼女は赤らんで園に駆け込んだ。少年アガムナンは考へた。「怒つて居るのだ——そして自分はほんとに醜いのか

知らん。"彼は長い間考へた。彼女は實際彼を醜いと考へたのだろうか。彼が彼女の眼の事を思ふと、その眼は何か別の事を云つて居た——それ等は何か別の事を云つて居る様に思へた。彼は向き直つて鼻に沿ふて行つた。ライラツクの繁みは青いて腕を波揺がせて彼に少女が門口に立つて、横に顔を押し當てゝゐる事を告げようと思つた。けれどアガムナンにはライラツクの繁みが云つた事が分らなかつた。彼女は恥しい故に彼に呼び掛け様とは思はなかつた。そしてアガムナンは家に向つた。

途中で彼はアダルバートに出遭つた。兩方共疲れて悲しそつた。細そりした婦人の犬がアダルバートに斯ふ云つて居た、"あんたは一寸もダツクスハウンドぢやないわ、あなたは雜種よ、チヨツ！ そんな眞直な脚をして！ 髪結ひに行つて、永久的にそれを曲げてお貰ひよ。"と。彼女はあちら向いて、茶色の斑の當てにならぬ巨きいファツクステリアと一共に行つて了つた。アダルバートは心で怒つた、彼の險しい目差しは二人のあとを追つた。フォックステリアは後を見た。彼は巨人だつた。アダルバートは、心で養え乍ら、大急ぎで誇り亂されてそつぽを見た。小さい婦人は彼女の魅力ある一瞥を彼に與へ様と思つた。フォックステリアはほんとに大きかつた——大へんよく育てられたのでなく、たゞ大きかつたのだ。彼女はもう一回"チヨツ！"と云つた方が上手だと考へた。

アダルバートには最早此れが聞えなかつた。彼は往來に出て居た。次の電車の下に身投げしたでもあらうか。いや近くにはそれを見得る者は誰も無かつた。けれどアガムナンに、彼は悲嘆に暮れた者がどんなに見え得るものかを見せたかつた。而り彼はきつとそうなそうと思つた。その時までは、自分を慰めてアガムナンと遭ふ時のために企てのなやみを敷へ上げねばならなかつただろう。それから兩人は町で出遭つたのだ。二人は眞面目腐つて並んで歩いた。"アガムナンは既に悲しいのだ、すれば彼に自分の感情を示すにも當らぬだろう。お、何んと云ふ哀れな淋しい犬なんだろう、己は。自分は眞直な尾をしてゐるつて彼女は云つた、腹の立つ！"

"彼女はあなたは美しくないと云つた。實際そんな事位何でもないぢやないか。彼女は空の様な眼を持つて居た。此處の町では雀斑のあの少女の眼の様な空も眼もありやしない。實際自分は醜いんだらうか。"彼等はそう云ふ風に考へ

た。夕方の彼等の御馳走は冷たかつた。彼等はそれを運命に依つて當てがはれた非常な打撃の様に喰つた。冷い御馳走！ 胸の悪い！ それらは唯青い空と青い眼から來るのだ。魅力ある。魂のある。目差しから來るのだ。あなたの方の御馳走が冷えますよ、外のものは何も冷えませんが。時々もつと澤山あれば……此變事もう澤山だ。

小年アガメムナンは實際最早少しも少年ではなかつた。彼は今では全く成長して居た。そして「若さに充ちた夢」の事を考へた時に彼は微笑するのだつた。此の微笑は彼を進歩させなかつた。それは柔いものでなかつた。何もかも知り理解して居ると考へて居る若い人々のみが持つて居る微笑だつたのだ。飯の事に關與したり日曜に教會へ行く人々を彼等は馬鹿氣た老人だと考へてゐる。若い者が同じ様に飯の事を考へるに到る迄には普通全く長い時間がかかるものだ、それから彼等も又屢々教會へ行つたり行かなかつたりする。趣味傾向に應じて……それから彼等は又アガメムナンの様に微笑まない。けれど違つたやり方でもつと柔かにほゝ笑む。と云ふわけは人間は微笑しなけりやならないからだ、若しせなかつたら人は何處に居られるだらうか。

けれどアガメムナンは誇つて居た。彼は學校を終へた所だつた、そして彼が考へた様に世の中が彼の足許に横たはつて居た。事實では彼が社會の足許に横仆つて居たのだ。そして社會が彼にその腕を差し延べて居た。此の頃に彼は再び町から散歩に出た。此度は獨りでなくて他の若い人々と一緒だつた。彼等は數千人の人々が彼等よりも以前に既に造つて居た所の長い熱心な演説をしやべつた。けれどそれらは彼等にとつて新しく重要に見えた。此の陽氣な一團は同じ昔の團の鼻を通り過ぎた。ライラツクは以前の様に彼等に肯いた。けれどライラツクはそう云つた事柄を小さい少女達に委して居た。アガメムナンはそれに氣を掛けなかつた。彼は最も深い問題に就いての議論に専心して居た。そしてライラツクは事實最も深い問題に屬しやしない。それから彼等は門の所に來た。門は廣く開かれて居たが誰一人遣入らなかつた、そして金色の髪と水色の眼を持つた少女がライラツクの繁みの下に立つて居るのを誰も見なかつた。彼等は皆通りすぎた。やかましく饒舌り乍ら。彼らは宿についた、其處で彼等は葡萄酒と麥酒とを飲んだ。多くの演説がなされ、酒はどんどん呷ふられた。彼等は歌つて陽氣にした。アガメムナンの不快な微笑は哄笑に變つて居た。彼等は皆それに

感染して、誰も他の者より饒舌らうと試みた。彼等は未來だつた、世界が彼等のものだつた。おまけに彼等は、人生の戦ひを知らなかつたけれど、男子であり征服者でもあつた。彼等は若かつた。勿論、征服者だつた、そして人は若い時には歌を唱つてたのし氣でなければならぬ。自分が強くて男らしい事を示す爲だけに又飲んで喫はねばならぬ。彼等は未來を征服し様と云ふ多くの立派な考へや欲みあるに拘はらず此う云ふ風に考へた。"人は斯う云ふ風でなければならぬ"と。それで彼等はそうしたので。自分等のポケットの中に入れて居ると想像して居た世界が彼等に困難な興味の無いゲームを始めてゐるとは彼等に感ぜられぬ所であつた。

歸り途彼等は皆陽氣で喧騒を極めた。一部ビールを飲み過ぎた爲、一部は未だ陽氣がぬけなかつたからだが。皆が前の園を通りすがつた時アガムナンは杖を取つてライラツクの枝を打ち始めた。ライラツクは自分に以前何か汚れた事をしたから今罰せられねばならぬと彼は想像した。裁判がなければならぬと考へた。その上彼はステッキを振り乍ら非常に男性的だと考へた。前の少女の事を思ひ、斯麼男らしい怒り方をして突立つて居る自分を見たら彼女にもそれが氣に入るに違ひないと考へたりした。此の故に彼は一層ひどく叩いた。月が雲に隠れ、夜鶯が鳴き止めてゐるのに氣がつかなかつた。彼は笑ひ、叫んで無關心に歩を續けた。けれど彼の若き頃の園は、さきの喧騒からづつとはなれた窓口に立つて居る少女に囁いた。"彼はライラツクを亡さねばならなかつたのです、と云ふ譯は、ライラツクが彼の眼を深く凝視したからです、そして彼を見抜いて了つたからです。けれど彼は戻つて來るでせう、そして彼は貴女と一緒に此の園に居るでせう。そして夜鶯はその小歌を繁みの中から月に歌ふでせう。貴女がた御兩人はお聞きなさるがいいです。貴女とアガムナンと。アガムナン——アガムナン、"と園は囁き棄摺れた。けれど少女は云つた"お、段々冷えて來る。風引かない様に寝なけりやならないわ、それからぐつすり暖まるわ。"

云ひ乍ら彼女は寢に行つた。月は再び雲から覗いた、そして理解出來る満月微笑をした。"老いさらばえた地球と俺が永久に青春だ"と伶俐な月は云つた。又月は慇懃だから一步譲つたが大した事でない。慇懃は善良な微笑むむにとつても唯だ慇懃だ。

數年後アガムナンはづつと遠くの燒けつくアフリカの暑さの中に居た。彼は自分の人生を造つたけれど幸福ぢやなかつた。彼は彼女を最後に見た目を常に思はねばならなかつた。づつと以前の少女ではない。而り、彼はその少女の事を全く忘れて了つて居た。それは誰か外の女だつた。素敵に幸福な一ケ年後彼等は分れた。彼女は夢想家なんかに自分の一生を捧に振り度かないわと云つたつけ。そして他の男の方に向いて了つた。彼が彼女にねだつたり、願つたり、強談しても泣いても駄目だつた。一年前彼は彼女の爲に山をも動かし得ると感じた……彼女の爲に。それから——彼はその事を考へたくはなかつた。彼等は自分の記憶物から逃れる爲づつと遠くに来て居たのだ。彼は世界を歩いて戀も忘却を深して廻つた。けれど充分の享樂の最中に於いてすら彼は心に荒れ狂ふ苦痛に追はれて傍そばにそれねばならなかつた次に彼は肉體と魂を自分の仕事に授け込んだ、そして今は長い年月の後にアフリカに来て居た。彼は農場での最上の勞働者だつた。土人は彼を愛したが彼は彼等を愛せなかつた。再三再四彼は獨り言ちた。"己は幸福だ、己は世界を征服した、己の人生に對する理由を發見して居るんだ、"と。けれど彼の遠き若き頃に於いて多くの夢を刺戟したあの同じ聲が再び醒めて居た、そして彼は自分自身をそれから閉め出す事が出来なかつた。今は夢見つゝ熱病にふるへて最も暗いアフリカに寢て居た。彼の黒人の少年は彼の床のわきに立つて、主人の並々ならぬ顔付きを訝つて居た。彼には主人の聯絡のない文句が分らなかつた。主人は遠いある園を求めてゐる様に思へた。次に再び彼は門口の棧を揺り動かして入れて呉れると叫び願つて居る様にも思はれた。斯處にして數日讀いた。數週後彼は醒めた、眼にはびつくりした様な影を帯びた表情を浮かべて。彼はあたりの人々を認めた。それから唇に子供の柔い微笑を浮かべて深い睡眠に落ち込んで行つた。

夢見乍ら彼は遠く過ぎ去つた昔の頃の様に夜鶯が歌つて居るのを聞いた。又遠く距つた月がライラツクの繁みの上に微笑して居るのを見えた。自分の健康を再び取り戻した時、彼は故郷に向つてその地を離れた——故郷へ。彼は充分金を貯へて居た。扱て、彼は若き頃の故郷の園へ歸らうと思ひ、ライラツクの繁みに歸り、次に死なうと思つた、而り彼は死なうと思つたのだ。お承知の通り彼は、哀れなアガムナンは尙少少迷つて居た。本國に到着した時、彼は歡待せ

られた。何故ならば彼は多くの事を仕遂げて居たからだつた。町は自分の息子を誇り、彼を讃へて多くの演説がなされ多くの葡萄酒が消費された。然し今や彼は斯廢事が何を意味して居るかを知つて居た。多くの人にとつて、葡萄酒と演説は彼等か讃へて居る自分よりも、もつと肝要なものである事も知つて居た。後に彼は小さい家を買ひ、唯自分の夢のみに生活した。彼は夢を書き下ろした、けれどそれ等を讀んで貰ふ様に人手に渡さなかつた、と云ふのは彼が怖れて居たからだ。" 謔言だ、" アガメムナンは微笑した。" 謔言 " だ。

彼はそれから庭園を企み始めた。街路に面して塀を造り、その後多くのライラツクの繁みを植えた、塀越しに彼等の花もたわやかな腕を差し延べられる様に。春になると、小さいクロロカス、藤色や白色のクロロカスが黄色のハートをつけて咲き出した。けれど黄色のクロロカスが一番美しかつた。" 恰も太陽が自分の園にその光線を注いで居たかの様に " とアガメムナンは云つた。美しい薔薇も又あつた。

赤や白。蔓は家を匍ひ登つて低い家根にまでも來た、そして物見高くアガメムナンが脇掛椅子に依つて居るのを窓越しに覗き込んだ。アガメムナンはパイプの煙を眼で追つて居た。薔薇は云つた、" 何と汚い事、どうして人はパイプを燻らす事が出来るんだらう。アガメムナンよ、來て私達の香を匂きなさい。窓に來て、私の香を吸ひ込みなさい。若し來るなら私達はあなたに大きい秘密を云つて上げ様。" アガメムナンは窓に行つた。薔薇は囁いた。" アガメムナン、アガメムナン、大きい白い百合が明日咲くでせう。彼女はあなたに云ふ事が澤山あるんです。彼女は少し傲慢で横柄ですがあなたには多くの事を談るでせう。彼女の趣味にとつては私達はあまり輕卒なのです、

けれどあなたには話すでせう。" ところでアガメムナンは微笑した。今こそ彼は花を理解したからだ。次の日に美しい傲慢な百合が花を開きそして囁いた。" アガメムナン、ライラツクの繁みあるあなたの庭を探しに行きなさい。それを探しに行きなさい。" けれど彼は頭を振つた。" 私は屢々それを探したので、

決してそれを發見したいとは思はない、今は自分は坐つて自分の庭の夢を見たい。" として彼はクラウンインペリアル (百合科の一種—註) の寢床へ行つた。彼等は、古い貴い名を持つて居た爲に横柄だつた。彼は又多くの種類、木犀

草や甘い匂ひのラベンダーも庭園の中に持つて居た。全てを彼は愛した。——花を。夕方なんぞにはアガメムナンは長椅子に腰を下ろして、一日の出来事に就いて談り合ふ花に聴き入つた。次に彼は嚴かに「おやすみ」を告げ、部屋に行き、家の後の高い堀の木の柔い葉摺れの音を耳にし乍ら脇掛椅子で寝た。彼は今幸福だつた。彼は微笑した。老いたアガメムナンは微笑した。彼は少し老年の爲に躊躇して居た。けれど彼は自分で殆んどそれに氣附がなかつた。彼の隣人は云つた。「面白い老人だね、けれど彼の庭は美しい。」恰も前者がそれに何か關係でもあるかの様に。

或る時——數年後だが——えらい日が來た。アガメムナンは散歩に出掛け、突然ライラツクの繁みある庭園の前に出た。いつぞやの時の様に門は廣く開かれて居た。彼は今や全く自然に興奮も訝りもなく這入つて行つた。「やつて來た、やつて來た」とライラツクの繁みは囁いた。庭園の中の奥の方に亭の中で小さい老婦人が座つて居た。そして編物をして居た。彼女は茶色の深い美しい眼をもつて居た。他の點では彼女は全く他の老婦人と同じだつた。

書かないでも我々は皆それらが分る。「私の侵入をお許し下さい、」とアガメムナンは云つた。

どの様に振る舞ふ可きかを彼は知らなかつたから。彼は附け加へた、「私の名はアガメムナン・ウィスルフィングです」と。小さい老婦人は微笑した。そして尋ねた。「私と一緒にコーヒをお飲みになりませんか。」それで彼はコーヒを飲む爲に滯つた。それが全てだつた。彼等は天候の事や出費の多い時の事や、又好きな花の話をした。彼女は彼に美しい昔のライラツクの繁みに案内し、二人でそれを讚めそやした。アガメムナンは幸福だつた、平常よりもつと幸福だつた。コーヒは品がよくて、

快くライラツクの香がした。次に夜鶯が歌ひ始めた。そして彼等は共に熱心に聴き入つた、老いた頭を背かせ乍ら。

今ではアガメムナンはよく此の小さい老婦人を此の美しい園に訪問する、すると兩人はお互に多くの話をする。時折アガメムナンは少少風呂敷を擡げるが、老いた小さい婦人は氣にせない。時々彼等は全く靜に相並んで掛け、智慧あり顔に物を囁くライラツクの繁みに聴き入る。そして若し少年が門口に立ち這入ろうとすると、その時には老婦人はそこへ行つて斯様に云ふ。「御遣りよ、ね、」

庭を案内してあげるから。それから三人は一緒になつてコーヒを喫む。後に彼等はその少年を再び歸らせて勉強させる。そして若し此等少年達の一人が彼らに一度でもその作文を示す時には「謔言だ」なんて云はない。だが兩人は少し微笑して老いた幾分ゆれる頭で肯く。若し彼等がいくらかのほんとは甚しい誤りを發見すると、彼等は彼にそう云ふてやる、

實際はそうはしてはいけないのだが。此ら老人連はちよつぱり迷つて居る事を御承知でせう。私は嘗て此の二人の人とコーヒを飲んだ事があつた。するとその時彼等は私に全て此の事柄を話してきかせた。彼等にとつては嘗ては遠い夢になつて居る、そして夢見乍ら彼等は眞理を發見して居るんだ。